

コシチューシユコにおける 反ナポレオンの行動の基盤

中山 昭吉

【要約】 一九世紀初頭、ワルシャワ公国成立期にも内外のポーランド人社会に影響力をもったフランス亡命中のコシチューシユコは、いかなる動機でナポレオンに加担しなかつたのであろう。自由・共和主義と国民主義が、前半生におけるアメリカ革命や蜂起時代の活躍から強調されてきたが、親ロシア的チャルトリスキ家との全生涯を通じた親交も無視できない。また、後半生にあたるブリュメール一八日以降に結実すると考えてよい民族解放思想や、ツァールへの好意的姿勢も指摘されるべきであろう。本論は、分割前後のポーランド社会に即し、伝統的な地域主義を重視し、彼のワルシャワ公国時代の沈黙と、生涯の最終的段階とみられるウィーン会議前後の政界復帰が前半生の諸側面を定着させたことを明らかにする。その結果、複合的なスラヴ諸民族から構成されていたポーランド共和国の再建に対する彼の民族解放思想に注目する必要と、ペン・スラヴ主義の形成におよぼした彼の積極的な役割をば、その全体像に賦与できないものが問われよう。

史林 五二巻六号 一九六九年一月

はじめに

新旧両大陸で展開した市民革命とナポレオン時代に生存したタデウシユ・コシチューシユコ Tadeusz Kosciuszko (一七四六—一八一七) は、ポーランドにおいて最高の権威と敬愛を今日まで受けてきた国民的英雄であり、誇り高い

愛国主義者である。こうした評価の成立基盤には、彼のアメリカ革命での戦功やフランス革命政府による市民権の獲得という国際的名声、それに国家滅亡に先だつ国民的蜂起での悲劇的で英雄的な行動などが大きく寄与している。

戦後の歴史学界の支配的状況下でも、彼の前半生を大きな基盤にして、愛国主義的な民主主義者という評価を定着さ

せつつある。

このような彼の全体像の形成過程を考察する際、輝かしい前半生のみでも決定的な基盤となりうるものであろう。

ところが、一世紀以上にわたる分割列強の支配下、彼を国家独立と民族解放運動の指導者として仰いだ国民的心情のあまりにも大きい累積で、ことさら誇大に美化された傾向は無視されてよいものだろうか。さらにまた、蜂起敗北後、二度と帰国することもなく、主としてフランスに亡命しながらも、ナポレオンに加担することもなしにワルシャワ公国時代に沈黙を守り通し、やがてウィーン会議前後にアレクサンドル一世と積極的な接触をもった彼の後半生も、充分には検討されない傾向が強いものの、はたして軽視されてよいものであろうか。^①

そうした意味から、現在でも、前半生に結実しているはずとされてきた国民的権威そのものが、「知られざるコンチーニェニコ」という立場から、根本的に再検討されている事実は興味深い。彼の前半生が客観的な立場で問われることもなく、彼の絶大な権威とその存在理由がもった歴史的状况のもとに、具体的な考察が今日まで軌道に乗りにく

い状況があったことを示している。^②しかしまた、彼の前半生における未知数の部分の解明次第では、当然、従来から軽視されてきた後半生の役割りが、全体像評価に多大の影響を与えかねない。こうした動向は、従来からの前半生の積極的な意義が疑問視され、ナポレオン皇帝に加担しなかったがゆえに、専制君主に対する共和主義者として、単純にも、彼を無条件に民主主義者として評価づけ、有力で指導的な現在の見解に論拠を提供する可能性もある。こうなれば、彼の後半生が全体像を決定づけられないとは限らない。

いずれにしても、多様な立場から数多くの伝記作品で扱われながら、いまだに論究しつくされていないのがこのコンチーニェニコである。

本論は、こうした問題意識を基調に、彼自身にとっても決断を迫られたワルシャワ公国成立期の反ナポレオンの行動と、その行動原理の基盤を探ることが主要な課題となろう。そのためには、彼の前半生を根本的に再検討する必要があるが、ナポレオンとのかかわりも、まことに望ましい彼の全体像評価の有力な手がかりを提供するものであろう。ナポレオンが重視した絶大な彼の政治生命は、ナポレオン

と対立した諸勢力にとっても重要性をもったはずである。彼の思想と行動がより明確に対決をせまられたこの時点で、彼の選択した道が全体像の評価におよぼした影響は極めて大きいと考えたい。

不明確な要素が多いこの時期の彼の動向を位置づけることは、とりもなおさず、彼の参画をみなかったがゆえに輕視され、十分に論究されない傾向をもつワルシャワ公国の明確な評価と位置づけをも容易にしてくれないものか。その上、この公国がもった主体的な成立基盤、指導原理、さらには時間的・空間的限界さえも、いま一つ別の角度から考察する場を提供してくれはしないものか。また、従来のフランスや西欧側からする東欧近代史におけるナポレオン時代の意味はもちろん、ロシア側からのものをも、行動半径と思想遍歴が大きいと考えてよいコンチエーヌコを通じて、あらためて再検討できるのではないだろうか。わが国でも未紹介に近いコンチエーヌコを取りあげる積極的な理由は、こうした歴史的課題に何らかの展望を与えたい念願にもかなおう。^③

① K. Falkenstein, Tadeusz Kościuszko, Wrocław, 1827; F. Pa-

szkowski, Dzieje Tadeusza Kościuszki, Kraków, 1872; T. Kozron, Kościuszko, Kraków, 1894; S. Askenazy, Tadeusz Kościuszko 1746-1817, Warszawa, 1917; F. Koneczny, Tadeusz Kościuszko, Poznań, 1917; M. M. Nomiata, Kościuszko, London, 1920; A. Próchnik, Demokracja kościuszkowska, Warszawa, 1947; J. St. Kopcewski, Tadeusz Kościuszko w historii i tradycji, Warszawa, 1968などの諸研究は、コンチエーヌコの全体像理解に役立つ。② J. Dłhm, Kościuszko nieznanym, Wrocław, 1969。これは、疑問が多い前半生のみ焦点を絞った、注目すべき最近の研究成果である。③ 本論では、具体的な資料に即して問題を追求する必要上、戦後、H. Alosciński によって編纂されて刊行をみた本格的な「コンチエーヌコ著作集」(Pisma Tadeusza Kościuszki, Warszawa, 1947)でできるかぎり利用した。以降、本『著作集』を Pisma と略記する。

一 ワルシャワ公国形成期対ナポレオン行動

——全体像評価とのかかわり——

蜂起敗北後の一七九四年冬、コンチエーヌコはペテルスブルクのペトロパヴロフスク要塞への道歩んだ。再度、故国に帰る機会を失わせたこの時期は、彼個人にとっても前半生との決定的な転換期であるが、ポーランド史の上でも分割列強による国家の滅亡という一時代を画する。これは、フランス革命との同時代性と深刻な関連性を重視する傾向が強いポーランド近代史にとっては、東欧史の枠さえも越える性格をもったものであろう。^① かつての新大陸の

英雄もまた、こうして、ロシアの首都に捕われの身となり、エカチエーリーナ女帝の没後、バヴェル一世によって九六年末に解放され、再度アメリカに向った。^②敗北の英雄を新大陸が迎えた九七年、ヨーロッパにあってはナポレオンがフランスの国民的英雄への道を歩みつつあった。コシチューシニコが九八年、またしてもフランスにおもむいた動機は、当然ながら故国への深い関心であり、ナポレオンの動向に左右されたものであったろう。^③九九年秋、彼を訪問したナポレオンに対し、彼もまた、儀礼をつくして、再度、ナポレオンに会見している。このように両者の接触が始まることになった。^④

これ以降、ナポレオンに反し、パリをほとんど離れることがなかった彼は、亡命ポーランド人に対しては来るべき解放戦争の国民的指導者として、フランス人に対しては高潔な共和主義の同盟者としての地位を築きつつあった。^⑤沈黙を得策としたブリュメール一八日以後の彼の動静にはつかみにくい点があるが、国家再建についてナポレオンとフランスがはたす役割を追求しつつあったと考えられる。一八〇〇年八月、慎重にも匿名で彼が刊行したとされる

『ポーランド人は独立のために戦うことができるか』^⑥においても、ナポレオン個人に対する政治的批判は皆無に近い。ポーランド問題の解決に際してナポレオンが彼を起用しようとする期待をかけたように、彼もまた祖国と民族の解放を、皇帝即位後すら、ナポレオンに対して期待をかけて待機したといえないものか。こうした推測をまじえない限り、〇六年のナポレオンによる対プロシア戦の開戦後、一躍、フランスの政界に彼がクローズ・アップされる理由が見出せない。

アウステルリッツ会戦直後、ナポレオンの將軍たちは、彼に期待をかけているコシチューニコを起用する時期が到来したことを進言することをばばからなかった。コシチューシニコの動向に神経をとがらし続けてきた分割列強のロシア側は、すでに〇六年初頭、副宰相クラキン公の意見にみられるように、パリの彼はもちろん、ザヨンチェク將軍や、有名なポーランドの叛乱者どもとその追従者のすべてがナポレオンの陣営にあるものと憂慮していた。さらに、ナポレオンのポーランド進出が現実性を帯びた一〇月、フーシエはじめ、多くの内外高官の出席のもとに、かつてな

い盛大なコンチューシェニコの生誕記念祝賀会が挙行され、来るべきポーランド王国の再建さえ祝福された状況を、メツテルニツヒは特別の注意を払ってウィーンに報告している。^⑦ベルリンでナポレオンとの協議後、一月三日にドンプロフスキ將軍とヴィビツキによって起草されて宣言された『国民蜂起の呼びかけ』でも、「ほどなく、無敵のナポレオンによって召されたコンチューシェニコが、諸君に自らの意志に従って挨拶を送る」旨が表明されていた。^⑧同日、ナポレオン自身がフーシェ宛にコンチューシェニコの来意をうながす書簡を送付したこととあわせ、コンチューシェニコがナポレオンとの共同行動に参画することは、すでに合意をみていた既成事実であるかのようにも読みとれる。^⑨ポーランド国内はもちろん、フランスにおける亡命ポーランド人の多数派も、彼がパリを離れることを予期したのも、至極当然のなりゆきであった。^⑩

秘密裡に行なわれただけに正確な日付けはないが、一月にフーシェはフォンテンブローに近いベルヴィルのツェルトネル家に滞在していたコンチューシェニコを訪問し、会谈する機会をもった。これはベルリンのナポレオンの要請

に応ずるもので、コンチューシェニコの決断を迫る内容のものであったにちがいない。その会談内容の信頼性を問うことはできないにしても、なんらかの具体的な行動上の合意もみていないし、コンチューシェニコは極力、ナポレオンとの共同行動については論究を避けている。^⑪實際上の拒否は、彼がナポレオンと上記のポーランド軍団の指導者、それに内外の期待と観測に反し、ベルリンに直行することがなかったという事実からのみ、具体的に知ることができただけである。その彼が、実現不可能に近いポーランド再建の三条件として、イギリス型議會政治、農奴解放、分割前の全領土の回復を提出し、間接的にナポレオンの要請に終止符を打とうとするにいたったのは、〇七年一月二十二日付のフーシェ宛書簡においてである。^⑫すでにポーランドにあったナポレオンが、マワホフスキ元帥を指導者とする行政委員会をワルシャワにおいて創設した一月一四日をはるかに過ぎていた。^⑬それでいながら、この書簡でも、条件次第ではナポレオンに加担する可能性さえうかがえ、打診的要素さえ読みとれる。ナポレオンは、〇七年二月のアイラウ会戦直後まで、コンチューシェニコに期待をつないだと考えられる。^⑭は

たして、コンチューシニコは、○六年十一月以降、明白な拒否的態度でこれに答え続けたであろうか。一八一四年に公式的な政治的発言を行なうまで、表面的には完全な沈黙が続いた。^⑤しかし、無署名ではあるが、アイラウ会戦後の三月七日付でフーシェに提出され、一八〇七年春のポーランド戦におけるナポレオン軍の有力な作戦計画の骨子となつたとされる『皇帝にして国王ナポレオン陛下に捧げる計画』をめぐって、コンチューシニコの動向が問題とされている。

筆蹟の類似性からも、それが数カ月におよぶコンチューシニコの労作であると強調されても不思議ではない。確かに、当時においても、ナポレオンに対する露骨な反目や批判を示さなかつた彼の行動からも説明できよう。^⑥パリを離れてアメリカに亡命が予想されもした○六年の夏とは異なり、設定された状況の中で、事態の進展をフランスで冷静に見守つた彼の姿勢には、ナポレオンとの決定的な決裂を回避するとともに、彼に対する期待さえも内心では抱いていたと想像できないものだろうか。この躊躇は、テイルジット条約の時期まで続いたとみなしていいのではなからうか。^⑦

以上のような経過をたどつたにもかかわらず、結果的に

は、どうした理由と動機で彼はナポレオンに加担しなかつたのであろう。彼が踏切つた慎重な決断には、今日まで多くの関心が注がれてきた。まづたく彼が正式言明をさげているせいも、実に多様な多面的なコンチューシニコ像が集中的に描き出されるのが、まさにこの時期である。本論が追求したい具体的な諸問題も、これらの諸見解にかなり集約されているので、ここで概観しておく必要がある。

まず、フランス革命の裏切者であり、専制主義的なナポレオン皇帝に彼を対置させ、彼の決定的動機を自由・共和主義者として強調する立場が有力で、その歴史も古く、その据野も広い。個人研究を十分に発展させなかつたマルクンズム史学にも受継がれ、戦後のソビエト史学と、それに近いポーランド歴史学界の主流的傾向もこうした見解を尊重し、彼を民主主義者として評価づける立場に大きく貢献している。彼のアメリカ革命以降の輝かしい行動が重視され、その説得力はまことに大きい。^⑧こうした見解に好意的ないしは批判的立場をとることは別として、戦前・戦後を通じて、彼の正当性を擁護する有力な足場とされてきたのは、彼にお

ける愛国主義的な国民主義を強調しようとする見解である。これまた、国民的蜂起時代の英雄的行動を頂点に、彼が巾広い国内の諸階級の結集と統合のもとに、自主的な国家の解放と独立を念願した立場に力点がおかれる。この見解によれば、進展した事態については、ナポレオンと同等のコシチューシユコが、フランスと対等のポーランドが容認されるべきであったとされ、彼の行動はまさにこうした態度にふさわしかったという立場で、これまた支持者が多い。⑩
 ま一つ重要なのは、前記のブリュメール一八日直後の著作やフーシェに対する表明にもみられるように、分割以前の国土回復を強調したコシチューシユコには、複合的なスラブ諸民族に君臨したポーランド・リトアニア連合国家の再建、つまり、パン・スラヴ主義のバイオニアにも通じる自負心があったとしたい。つまり、急場主義のナポレオンとその同調者との決裂を生んだのは、こうした彼の理想主義的な民族解放思想の発露として把握されよう。⑪
 以上はいずれもが、ナポレオンの大陸支配体制と対立するものであったこと事実であり、彼の立場をより主体的にとらえ、それなりに説得力をもとう。前二者は特に彼の前半生の行動原理との

とは連続性を強調し、その輝かしい側面を肯定的にとらえ、しかも、正当性をもたせようという同情的性格が強い。

しかしながら、他方で、現在にいたるまで無視できない地位を築いてきたワルシャワ公国史研究の立場は、次元をかえてナポレオンと行動をともにしたポーランドの主体的勢力の行動を根本的に検討する中で、直接・間接的に、以上のコシチューシユコ評価に再検討を鋭く迫ってきた。分割列強の支配下にあったポーランドにおいて、ナポレオンとフランス軍がもった積極的役割を客観的に評価しようというこの立場は、ポーランドに不在であったコシチューシユコに歴史的正当性を与えることなく、この時期のコシチューシユコを批判的に考察する。当然ながら、コシチューシユコが冷淡な態度を示したにしても、ナポレオンとともに転戦したポーランド軍団の役割が評価され、ワルシャワ公国の指導者たちの現実主義的な国家再建の行動に力点がおかれる。確かに、ヴィビツキ作詩による『ドンブロフスキ將軍のマズルカ』が今日の国民統合のシンボルともいふべき国歌にされていることから、これらの立場をとる諸見解も、無視できない説得力をもつ。⑫

この立場の功績は、当時のポーランドにあっては、大別してコシチューシユコを指導者にしたもの、ナポレオンとその同調者を解放者にしたもの、それにロシアのツァールから解放されるポーランドを期待した「チャルトリスキ派」の三大勢力を対置し、コシチューシユコの立場をより相対的な関係で考察する必要をもちこんだことにある。さらに、こうした動向は、ウィーン会議時代にツァールと行動をとともにしたアダム・J・チャルトリスキと彼の親交関係さえ追究し、結果的にはツァールに対して武器をとらなかつたコシチューシユコの立場をば「チャルトリスキ派」に近いものにさせる論拠を与えた。一方では、彼とナポレオンとの関係だけではなしに、ツァールとの関係さえもが追求されるべき糸口が用意され、他方、コシチューシユコの国内的支持勢力と、その有力な反対勢力との関係も無視できないことを提起した。これらの諸見解の多くは、前半生の行動に深く立入っていない点から、国家の悲劇と運命をもにした彼の後半生を断絶的にとりあげる傾向をもち、この時代の行動に対する心情的理解さえみられても不思議ではない。そのようなわけで、当時の彼の年令、健康状態、

個人的なナポレオンに対する嫌悪感、さらには英雄主義的虚栄心とライバル意識などの動機が重視され、そうした立場で論究される余地を生む。これらの要素も確かに無視できない。また彼の日和見主義、打算、名声ゆえの保身などの非難も指摘されることも稀ではない。いずれにしても、こうした数々の見解が、コシチューシユコ像の理解をますます困難で複雑なものにしかねない。

本論の課題は、必然的に、以上の諸見解に対する具体的な検討を必要とするが、一貫性をもち、より適切で有効な全体像評価の基盤を探ることにある。その意味で、当時のポーランドで進行した社会背景を重視し、論究されることがあまりにも少ない、当時の地域主義的基盤を考察の対象にしたい。つまり、彼にあってのリトアニアと、ワルシャワを中心としたマゾフシエを含む伝統的な大・小両ポーランドという王国領を成立基盤にした地域主義に注目したい。ワルシャワ公国の主体的勢力は後者の地域主義的基盤から追求できないものかということである。より明確に、コシチューシユコの反ナポレオンの行動の基盤をこうした観点から解明できれば、彼の全体像の新しい評価づけが可能となる

う。そのことは、また、いまだに確立されていないポーランド近代史におけるワルシャワ公国の位置づけと、さらには当時のナポレオンとプロシヤの位置づけと、さらには「やえち」ある程度は展望できる場を与えてくれるにちがいない。

- ① H. Jabłoński, *Miejszynarodowe znaczenie polskich walk narodowyzwoleńczych XVIII i XIX w.*, Warszawa, 1955; ders., 'Die internationale Bedeutung der nationalen Befreiungskämpfe im 18. und 19. Jahrhundert in Polen', *Zeitschrift für Geschichtswissenschaft*, Beiheft 3, 1956. 以下『代表的見解として』指導的翻譯による。S. Kieniewicz, *Historia Polski 1795-1918*, Warszawa, 1968. 以下『同じ基本的立場から』一七九五年を近代史の時代区分の根拠としている。
- ② 興味深いコンテューシエロのシュンホルン一世との会談内容は『Pisma, nr 74, 以下の書簡について』J. U. Niemcewicz, *Podróże po Ameryce 1797-1807*, Wrocław, 1959. 以下『そのなかの』とある。
- ③ 『ソマリ到着後』彼はシュンホルン一世に謝意と寵顧の念をこめた書簡を寄せ、『ソマリ系』のギエロロの手揮筆には独立回復への熱情を綴っている。『そのなかの』内容は『Pisma, nr 76, 77.』
- ④ J. St. Kopczewski, op. cit., s. 24. 一〇月一七日にナポレオンが彼を訪ね、一一月六日、その返礼を兼ねたコンテューシエロが聖スエレン教会を訪ねて両者は再会している。
- ⑤ 一一月前後の『「ソマリ」共和主義者協会の』への接近のみではなく、軍団指揮者ドロンヌンキ軍やヴァロシキ、軍団隊長トボチの書簡や一連の呼びかけの書簡をみる。『Pisma, nr 78, 79, 80,』

81, 82. また、總裁政府とフランス軍事大臣への接近については、nr 83, 84.

- ⑥ Pisma, nr 85. 日付は明記されていないが、全文が掲載されている。本書作は E. Halicz によって充実した解説と註釈がつけられ、単行本として没後一五〇周年の一九六七年に刊行された。Czy Polacy wybić się mogą na niepodległość, do druku przygotował i wstępem opatrzył Emanuel Halicz, Warszawa, 1967. 以下『そのなかの』内容は『そのなかの』の註訳『西洋史学』八〇巻、一九六八』参照。本論では、本書を利用するのと同じ引用の『Czy polacy』を註記する。
- ⑦ E. Halicz, *Geneza Księstwa Warszawskiego*, Warszawa, 1962, s. 135, ss. 142-143.
- ⑧ Archiwum Wybickiego, Gdańsk, 1948-50, II, nr 479.
- ⑨ Correspondance de Napoléon I^{er}, t. XIII, n° 11153.
- ⑩ E. Halicz, op. cit., s. 146.
- ⑪ Pisma, nr 89.
- ⑫ ibid., nr 90.
- ⑬ M. Handelsman, *Napoléon et la Pologne 1806-1807*, Paris, 1909, pp. 78-79; *Wybór tekstów źródłowych z historii Polski w latach 1795-1864*, Warszawa, 1956, nr. 53.
- ⑭ E. Halicz, op. cit., s. 123.
- ⑮ Pisma, nr 91. 日付は不明であるが、一八〇七年の沈黙から、『ソマリ』一四四年に発表されたもの。内容は、ワルシャワ公国時代に日進を受けた農民の善処策である。
- ⑯ E. Halicz, op. cit., s. 154.
- ⑰ ibid., s. 149, ss. 155-156.
- ⑱ ibid., s. 118, ss. 130-131. 以下『J. Lelewel, J. Marchlewski,

1902年 Heropim Tomshu, Moskva, 1954, II: T. Mantuffel (ed.), Historia Polski, Warszawa, 1958, II, 2 201-210 頁及 201-202 頁。なお、後者の引用は、以降、Historia Polski とする。A. Próchnik, op. cit. 201-210 頁に傾向を代表する。

⑭ E. Halciz, op. cit., ss. 118-128 は、これらの見解と反論を網羅し、優れた研究紹介と研究発達史の部分を構成している。

⑮ H. Kohn, Pan-Slavism. Its History and Ideology, New York, 1960 (2nd ed.), pp. 27-28 が、その程度は参考にならぬ。なお、M. Ogiński, A. Stubiński, K. Falkenstein, B. Limanowski, F. paszkowski などの研究者にも、こうした傾向がみられる。

⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿ などの中でも代表的なのは、S. Askenazy, M. Lorek, A. M. Skalkowski などがあげられよう。現在でも、こうした傾向は E. Halciz などのワルシャワ公国研究者にも受継がれている。

㊿ A. M. Skalkowski の立場は、こうした考察に充分な配慮が払われていない。

二 アメリカ革命参加への道

——自由・共和主義の実体——

「家族派」と「共和派」

一六世紀後半に断絶をみたヤゲウオ王朝（一三八六—一五七

二）は、固有の王国領小ポーランドのクラクフを拠点に、

リトアニアの政治的な指導性が発揮できる基盤をその成立過程にもっていた^①。それに対し、第三次分割で滅亡をみる

ポーランド共和制王国（一五六九—一七九五）は、マゾフシェのワルシャワを拠点に、ウクライナを併合した大・小両ポーランドとマゾフシェから構成される王国領と、リトアニアとの連合国家であった。全国土のポーランド化が、選挙王制下の相つぐ外来王朝のもとで積極的に展開した。コシチューシエコ生誕の一八世紀四〇年代は、ザクセン王朝下の共和制王国が内外の政治的危機とともに、一大転換期を迎えつつあった時代に相当する。絶対主義を確立し、抬頭しつつあった列強諸国の中であって、こうした動向を許容することが少なかった国制は対応をせまられていた。外来王朝のもとで勢力均衡に甘んじてきた国内の潜在的な王権勢力が、ようやく胎動しはじめる時代が到来しつつあった^②。

絶対王権への挑戦は、すでに一八世紀初頭から三〇年代にかけて、フランスとスエーデン勢力を背景に、大ポーランドを基盤にして王位についたレンチンスキ王の悲劇的結末にみられる。リトアニアを基盤に、王国領にも勢力を伸長しつつあったチャルトリスキ家の抬頭をうながしたのも、同じく反ザクセン王朝の動向にそうものであった。「家族派」を指導し、強力な王権の確立をはかったチャルトリス

キ家は、ロシアとオーストリアの支持をとりつけ、姻戚關係を結んだマゾフシエの一領主ポニャトフスキ家を次期国王に擁立する意図から、伝統的な国制に反対する国家改革を積極的にすすめる姿勢を示した。「家族派」が議会に提案した「財政・軍事改革案」(四四)、「財政改革案」(四六)、「経済委員会創設案」(四八)、「司法制度改革案」(五〇)などから、チャルトリスキ家の着実な布石が具体的にうかがえよう。しかしながら、これらの改革案は、フランスを背景にして親ザクセン王朝色が強く、小ポーランドを拠点に王国領に勢力をふるっていたポトツキ家指導の「共和派」、ないしは「愛国派」と称される反対勢力によって流産の憂き目を見、両派の深刻な対立は議会機能の停止さえ招いた。^③ コンチューシュコの後半生にあたるナポレオン時代においてさえ、こうした両勢力の動向と、それらの成立基盤となった地域主義がもった利害の不一致と深い溝は、はたして克服されていたであろうか。むしろ、この国民的英雄像の成立過程にはたしたリトアニアの地域主義の役割が積極的に論じられていいのではなからうか。

彼の生誕時代は、賦役農場制の全般的な危機が進行して

いた。少年時代の五〇年代中頃、王国領を中心に発生した大規模な農民蜂起の動きは、彼の生地リトアニア西部にも波及するいきおいであった。リトアニアと比較して都市が発達していた王国領の領主やシュラフタは、商工業活動に積極的に介入して地位の保全と強化をはかることも容易で、外来の弱体王権は彼等の伝統的な特権行使にあたっては好都合に作用した。ヴィスワ河水系の確保と黒海進出をはかったポトツキ家は、こうした王国領の支配的勢力の要請にも応じられたし、王国領を中心に急速に抬頭しつつあった市民勢力に理解を示し、その利益を代表する立場にもなれた。バルト海と黒海進出をめざした隣接の分割列強と基本的に対立したポトツキ勢力は、ワルシャワとさらにはリトアニアにもその影響力を容易に浸透できる有利性をもっていたといえる。^④ その点、ロシアとオーストリア勢力を背景にしたチャルトリスキ家は、リトアニアを中心に、弱体ながら小ポーランドにも伝統的な勢力基盤があったが、勢力伸張をはかるべきワルシャワにおいては劣勢にたった。ポニャトフスキ家との結合を通じて、ポトツキ家の影響力の大きい王国領の諸勢力に対しては、充分に影響力を行使

できない立場にあったと思われる^⑤。啓蒙主義に理解を示し、領主とシュラフタの伝統的な諸特権の徹底をはかった「家族派」の国家・社会改革の意図は、ポトツキ家の成立基盤

である王国領の優位に対して効果的な打撃を与えるために役立つものであった。なぜなら、有利な商工業活動に転進しつつあった王国領の領主と抬頭する市民階級の圧迫下、階層分化の危機に直面していたリトアニアと全土の農業を基盤にした中・小シュラフタ勢力、それに蜂起勢力となつた広範な農民勢力を自派に結集させうる可能性もあった。

チャルトリスキ家の反ザクセン王朝的立場は、たとえリトアニア至上主義にもとづく自派の強力な王権確立という指導原理をとつても、より広大な国土の多数派から同意をとるかぎり、外来王朝に対抗する正統王朝をポーランドに再興することが可能であるという使命感とは矛盾しなかった。チャルトリスキ家と王国領の利害の不一致は、分割時代のポトツキ家と領主層との間はもちろん、蜂起時代とナポレオン時代を通じ、王国領の指導的勢力となるにいたつた市民階級との間にも、埋めることができない溝を一貫して存続させる可能性があった。対立的な「家族派」と「共和

派」の成立基盤となつたリトアニアと王国領に内在していた地域主義の重要性に注目したいわけである。

終生チャルトリスキ家との関係が絶えなかつたコシチューシニコの生地は、ブジュシチ県であり、家系もまたリトアニア系の中流シュラフタで、チャルトリスキ家の立場とはなんらの基本的な利害の対立をもつものではなかつた。

ただ、生地が王国領との接点に位置していただけに、時代の風潮が浸透しやすかつた。父は、リトアニア領軍管区の連隊長と王室の大刀持職の名誉職を売却後、三〇〇ヘクタール近いチャルトリスキ家の所領を領主サピェハ家を経て購入し、約三〇〇人の賦役農民をかかえる農場経営に転進した経歴の持主であつた。こうした進取的な企業家精神が発揮できたのも、その地域性によるところが大きい。しかし、コシチューシニコが初等教育を受けたのは近郊のピアリスト派修道院であり、この派の指導者は、親「家族派」の立場で、ザクセン王朝時代の啓蒙主義運動に活躍したコナルスキであつた^⑥。

アウグスト三世没後、六四年の国王選挙議会でロシアの支持をえた「家族派」は、念願のポニャトフスキの即位を

実現させた。コシュチュコが六五年に第一期生として入学した士官学校はこの新国王によって創立され、アダム・K・チャルトリスキが総監であった。これは、王国領小ポーランドのクラクフやルブフと比べ、指導的な高等教育機関をもたなかった当時のワルシャワにあって、チャルトリスキ家が確立を期した啓蒙主義的絶対王権を支える軍人・官吏養成機関の機能と性格をもっていたといえよう。国家と新国王への忠誠を最高理念にした教育方針は、実質的にはリトアニアの指導性に基づく国家の統合・支配をはかる道に通じた。在学一年で将校に任官し、士官学校の教官に就任できたコシュチュコは、「家族派」の要望と期待をになつていたにちがいない。確かに、彼は、一方では画期的な新時代の愛国・民族主義思想に共鳴はしているが、他方で、勇気をもって自己を克服するために内面的な苦悩を綴っている。その理由は、王権勢力となつた「家族派」の行動原理に対する彼なりの反撥や批判的精神にあるのではなからうか。彼は、当時の反王権「チャルトリスキ家勢力の動向を察知できる立場にあつたといえよう。

第一次分割時代と地域主義

六八年、王国領にまたしても発生した農民蜂起は、リトアニアにおける国王領の解放運動にまで発展した。これと呼応するかのようには、反ロシア、反国王、反異教徒をスロークアンにしたバル連盟が結成されたのも同年であった。この連盟は、カトリック教の聖地チェンストホーヴァ近郊でロシア軍の支援を受けた国王軍によって鎮圧される七二年まで、前後四年間にわたつて王国領を基盤に、伝統的な国制の防衛のために戦つた。コシュチュコが忠誠を誓うべき王位そのものが危機にひんし、「家族派」も大打撃を受けた。たとえ、劣勢挽回をはかるポトツキ家と「共和派」に結集した領主層の指導性が強いものであつたにしても、この連盟が旗印にした愛国・民族主義的傾向にはルソーの啓蒙思想を理念にした共和主義的な市民革命の精神がみられ、トルコとザクセンとの連帯を通じ、フランスとの共同行動が強く意識されてきた。また、その中核は王国領のシュラフタの結集体で、司教職のクラシンスキや、コシュチュコ以前にアメリカ革命に参加することになるプワスキなどが指導的役割を演じた。^⑧彼の苦悩の深奥は、この内戦時代の到来を予期していたことによると考えたい。

すでに副旅団長の地位にあった彼は、この内戦時代の初期にあたる六九年から第一次分割後の七四年にかけ、ポーランドを離れるという行動でもって自己の克服すべき道を選んだ。彼の芸術的才能を評価した啓蒙主義的国王とシャルトリスキ家の好意をとりつけた彼は、パリのルーブル王立美術アカデミーで絵画修業にいそむことになった。実際上の彼は、親フランス的「共和派」とバール連盟に対抗するシャルトリスキ派の策動を任務にもった使節であったかも知れない。また、国王の要請でフランス各地の軍事学校で砲術を修得することがこの留学の主目的であったという推測も生じよう。^⑨ それでいながら、彼が結果的には内戦に直接手を汚さなかった事實は、バール連盟派に対するせい一杯の共感を示すこともできた。これは、今後の彼の行動をみる上で、大きな意味をもつことになろう。しかし、フランス留学時代、王国領からと推定してよい亡命ポーランド人の多数派がフランス軍に志願する中で、彼は西欧各地を遍歴して帰国した。^⑩ 国王とシャルトリスキ家に対する忠節から当然のことであったにしても、逆にフランスに亡命を決しなかった彼は、異境にあって、しかも亡命ポーラン

ド人社会でも、少数派のリトアニア出身者であり、国王「シャルトリスキ派」と意識され、その違和感からの脱出をはかる必要があったといえないものだろうか。

第一次分割は、東部辺境の一部をロシアに併合されたりトアニアに反し、王国領の犠牲が大きい。シャルトリスキ家の指導性の確立は、対立的な両家の婚姻関係で生まれた表面的な妥協にもよろう。しかし、オーストリアによる小ポーランド併合でその成立基盤の多くを失なうことになったポトツキ家と「共和派」が直面した地位の低下、プロシアによる大ポーランドの併合がもたらした市民勢力の弱体化などという、相対的な関係も重要であろう。^⑪ 七年の常設会議の設置は、王権強化をめざした「家族派」の国家改造計画を具体的に進める母体となった。しかし、帰国したコシチューシユコが、こうした動向に批判的立場をとって亡命を決意するにいたったほど、ロシアの傀儡と化した国王をようした「家族派」の指導性は、確固とした巾広い支持をえていなかったといふべきである。彼は、「国王派」に近いものの、「シャルトリスキ派」とは対立関係にあったクラクフ城守ムニシェフ宛に七五年一月、ザクセン政府

に奉職したい希望を述べ、その依頼を切望している。^⑩

彼のザクセン亡命の意志は、「共和派」や共和制王国の防衛を志向した王国領勢力の伝統主義的な共和主義への接近を意味し、リトアニア的要素からの離脱に通ずるものであった。しかし、希望は実現されず、克服すべき「家族派」からの独立をフランスに亡命することではなし、さらに七六年、革命勃発直後の新大陸に渡った。彼に劣等感さえいだかせたと想像できる後進的なりトアニア地域主義との決別をはかろうとした心情が、彼を英雄主義的な共和主義への道にかりたてたといえないだろうか。プロスキにもむかえられたアメリカ革命への参加は、彼の念願を充足させるものであったにちがいない。サラトガやウェスト・ポイントでの戦功で代将に任官し、八三年にシンシナティ勳章を授賞された彼は、前後約一〇年間をアメリカ革命とともに過ごした。^⑪ フランクリンとの接触をはかったアダム・K・チャルトリスキの要請に応じた六七年以降、彼との音信を絶ったコンチューシュコは、^⑫ こうして海外において国民的英雄と進歩的共和主義者としての名声を獲得することになった。生地を帰国後、所領の賦役農民を解放し、八八年からは

じまる大議會 (四年議會) の動向には深い関心を寄せた。また大ポーランドの出身で抬頭する王国領における市民階級の指導者の一人であったスターシツの社会改革と国家防衛論にも影響されたのであろうが、彼もまた、市民的立場を尊重した共和主義政体下の国家論を摸索している。^⑬ いまだに世襲王制が確立していなかった当時の状況では、彼が伝統的な共和国の防衛に参画しても、議會勢力を占めていた「共和派」や市民階級の立場と同様に、彼も共和主義者でありえた。八九年に服役して少将に任官した彼が、配属されることになったのは、王国領軍管区のプロシア領に近い大ポーランドである。

その彼が、任地におもむいて間もなく、ウォツワールヴェクからニェシヨウォフスキ將軍に宛て、リトアニア領軍管区への転属を九〇年二月七日付の書簡で懇願しなければならぬ状況が生じた。その書簡にリトアニア防衛の使命感があふれているのは、ロシア軍の進出が予期された生地への関心という、素朴な地域主義への回帰だけだったといえない。理念的にいだいていた共和国の現実には幻滅した、実に強烈な地域主義的立場が表明されている。軽蔑すべき

「ガスコニー人」という憎悪をこの王国領大ポーランド人に投げかけているこの書簡は、彼の将来の思想と行動を決定づける重要な意味をもとう。¹⁶ 客観的には、プロシアによる分割で触発されたこの大ポーランドの強烈な地域主義が、それに油を注ぐように、「チャルトリスキ派」の国王勢力をこの誇り高い王国領に浸透させる立場にあったコンチューシニコに対決をせまったというべきであろう。

国名そのものの起源となったこの大ポーランドは、由緒ある国家誕生の土地であり、しかも、他の地方以上に商品経済の発達もはやく、反封建的で実利主義的な気風をポズナンを中心に育てていた。強力な反王権勢力を形成しつつあったこの地には、フランス革命の影響も受け、共和制王国の伝統をのりこえる革命的な市民階級さえ成立させる社会基盤が熟しつつあった。¹⁷ それは、反チャルトリスキ勢力の強力な拠点を意味した。アメリカ革命の英雄とは共通の革命的共和主義的立場にあるはずの、この大ポーランドの同胞たちに反感を露骨に示したコンチューシニコの行動原理を理解する鍵こそ、克服されるべきはずであった彼の地域主義と、それを触発した大ポーランドの反リトアニア

的地域主義であると考えられないものか。王国領大ポーランドに背をむけた彼の地域主義は、チャルトリスキ家と「家族派」にある潜在的なリトアニア至上主義との接点に立戻る契機を彼につくらせたとはいえないか。これは、当時の時点で伝統的な国制にもとづく共和主義者になりえても、やがて確立する世襲王権に対抗して市民革命を志向することになる王国領の進歩勢力からすれば、状況によってはアメリカで行動をともしたラ・ファイエットのような立憲君主主義にも通じる可能性すらもつもので、市民革命時代の自由・共和主義と同列にならべられにくい。

社会基盤を異にして、ポーランドでも形成されていた強固な地域主義が論じられる傾向がすくないのは、現在の時点と関心から論究される傾向が強い歴史研究によるのではなかろうか。すくなくとも、ここで追求を試みたチャルトリスキとポトツキ両家とそれら両派閥の対立・抗争関係に内在していた二大地域主義は当時、コンチューシニコの行動にはもちろん、各地方にも分割時代を通じてことあるたぎに触発される状況にあったと考えたい。それはまた、蜂起時代、さらにはナポレオン時代をむかえるポーランド社

会にも深く根ざし続け、重要な役割を演じたといいたい。

- ① ヤゲウォオ王朝時代のリトアニアを主体的に扱った最近の研究成果として、J. Ochmański, *Historia Litwy*, Wrocław, 1967 を、山成人「ポーランド・リトアニア連合小史」(『メヌマ研究』十号、一九六六)が参考になる。
- ② *Historia Polski*, I, 2, ss. 746-772; S. Kieniewicz (ed.), *History of Poland*, Warszawa, 1968, chap. X を参考する。後者の引用は *History of Poland* による。なお Cambridge *History of Poland*, 1941, I, chap. I-IV を参考されたい。拙稿「ポーランド分割の国内的前提」(『桃山歴史』七号、一九六八)もまたこの時代を概観する目的に役立つであろう。
- ③ *Historia Polski*, I, 2, ss. 756-760; *History of Poland*, pp. 283-312。両者は当時の主要領土の所領を示す地図は、*History of Poland*, p. 293 を参照。
- ④ B. Zientara, A. Mączak, I. Inhatowicz, Z. Landau, *Dzieje gospodarcze Polski do 1939 r.*, Warszawa, 1965, s. 271; *Historia Polski*, II, I, ss. 162-168; J. Wąsicki, *Ziemie polskie pod zaborem pruskim*, Wrocław, 1957, ss. 98-108; I. Gieysztorowa, A. Zahorski, J. Lukaszewicz, *Cztery wieki Mazowsza*, Warszawa, 1968, s. 66, 168 などから、王国領が一八世紀後半を通じて約二―三割の都市人口を占めたことが知られる。それに反し、J. Ochmański, *op. cit.*, ss. 133-134 から、リトアニアは九〇年代から二三割強を占めたにすぎず、六割を数えたシユラフタの大多数が耕作地非所有者となり没落にひんし、庄侯の多数の農業人口が支配していたことが認められる。
- ⑤ ヤゲウォオ王朝の血統を誇るチャルトリスキ家の家系については、M.

Kukiel, *Czartoryski and European Unity 1770-1861*, Princeton, 1965, p. 3.

- ⑥ F. Koneczny, *op. cit.* ss. 10 ff.; K. Koźmiński, *Koścuszko*, Warszawa, 1958, ss. 9-17. なお W. Rusiński, *Rozwój gospodarczy ziem polskich*, Warszawa, 1963, s. 130 にそれがあり、当時の平均的な財産規模は五〇―一〇〇スタール、賦役農民数は一五―一六人の規模とされている。コンチエニューロ家は中流でも上位のシエラマに所属していたといえる。
- ⑦ *Pisma*, nr 1. これは「誓字」という表題がつけられた自筆ノート(一七六六―六八)で、彼は、「最大の勇気を示すことが可能で、しかも、その必要性があるものは」と問いかけて、「自分自身を克服する」これが最大の勝利である」と記している。
- ⑧ *Historia Polski*, II, I, ss. 63-71; *History of Poland*, pp. 324-327. なお、ポーランド連盟の動向をめぐるとは別に、ポーランド史における連盟自体の法制史的問題については、鳥山成人「ポーランドの『連盟』と身分代表制」(『メヌマ研究』九号、一九六五)参照。
- ⑨ ほぼ有名な推測を生かして、留学時代については、J. Dhim, *op. cit.*, ss. 34-37 が詳しい。彼とその他の同僚オルウォヌスキは送金した國王が、十二年の支出簿にその使途として「士官、兵士、砲術」と明記していることが指摘されている。美術修業に対する配慮がなされた注目に値する。
- ⑩ K. Koźmiński, *op. cit.*, s. 29.
- ⑪ *Historia Polski*, II, I, ss. 75-81. 第一次分割については、H. H. Kaplan, *The First Partition of Poland*, New York, 1962 が個別研究としてすぐれているが、政治・外交史的把握が主眼になっている。
- ⑫ *Pisma*, nr 2. この領主の邸宅があった土地から宛った書簡で、彼は、「……いつかわれわれの祖国にとつて有力にして、市民の義務か

ら祖国に報いるためには、ザクセン宮廷に方向づけられた私の歩みがとっておきの目的となりましょう。残念ながら、私を歡喜させようとしたこのポーランドの現状では、私が何らの幸福をこの国に捧げられないからであります。……」と述べ、クラクフ經由でドレスデンに直行する意志を表明している。

¹⁵ Pisma, nr 3, 4, 5 などのゲイツ將軍、グリーン將軍、ウィリアムスに対する書簡は、興味深く、彼のアメリカ革命への姿勢が読みとれる。また、彼の詳しい活動そのものは、J. St. Kopcewski, op. cit., ss. 355-368 参照。

¹⁶ M. M. Gardner, op. cit., p. 42.

¹⁷ Pisma, nr 6, 7 には、「國民衛兵創設論」である。農民、市民、ユダヤ人の解放を前提にした彼の国家防衛論が展開されている。また、同郷人で、リトアニア領軍管己に所属し、大議會に派遣されてルーシ諸地域（ロシア）での反乱告発議會側調査員であったザレスキ宛の二通の書簡内容も興味深い。彼は、調査担当將校の行動と権限に疑念をよせ、共和主義の政体下では將兵の力量發揮が第一義で、主義主張に対する刑罰は第二義とすべきことを強調し、むしろ、反乱の原因となった高官の國費の乱用には絞首刑を含む嚴罰でのぞむように力説している。また、ポーランドとリトアニア領主の残忍な支配下に無知にされてきたルーシ諸地域の異教徒の被支配者には、ポーランド國民への同化をはかるため、残虐と圧迫行為を回避し、宗教的寛容の精神をもつ必要性を強調している。Pisma, nr 7, 8.

¹⁸ ibid., nr 9.

¹⁹ 本章註④の諸文献の引用箇所、ヤウロ J. Wasicki, 'Powstanie Kościuszkowskie w Wielkopolsce, Studia i materiały do dziejów Wielkopolski i Pomorza, II, 1, 1956, ss. 32-34 を参照された。

三 蜂起時代と親チャルトリスキ的動向

——國民主義的背景——

蜂起指導部内の対立

國家の滅亡に結びつく第三次分割の契機となった蜂起は、國民蜂起と称されると同時に、通常はコシチュエーシユコ蜂起の名で知られる。^① ここでも、蜂起時代における地域主義の社会背景とその動向に立脚し、彼の國民主義の側面を充分に検討しておくことが、ナポレオン時代における彼の行動原理を理解する上で重要な意味をもとう。

すでに九一年、國家改革をはかる目的で召集されていた大議會は、その成果の一つとして、世襲王制をもちこんだ近代の欽定憲法を『五月三日の憲法』の名で成立させていた。共和制王国時代の伝統ある議會で國運がかけられたその成立過程は、分割がもたらした國家的犠牲に対するきびしい現状認識に基づき、従来にも増して、挙党一致の立場から審議されたとみなされる。^② しかしながら、議事運営にあたったのはマワホフスキ元帥であり、「共和派」の伝統をつぐ「愛國派」主流のイグナツィ・ポトツキとコウオンタ

イという小ポーランドを基盤にした諸勢力と、大ポーランド出身の富裕市民として市民階級を代弁したワルシャワ市長デケルトなどの活躍からも、王国領諸勢力のイニシアチブが極めて大きい^③。当時のヨーロッパで誇りに足りるこの近代的な憲法が成立できた背景は、議会内でも数の上でも優勢であった王国領の市民階級に足場をもった社会改革勢力が、後進的な農業地域を基盤にもつリトアニアを背後に、王権強化をはかった「チャルトリスキ派」勢力との妥協の産物といえよう。互いに自派の主張を盛りこんだことで、充分に進歩的な内容をもつにいたるこの憲法に対し、軍務にあったコンシューニコは冷静な第三者のように言及を避けていることは興味深い^④。それは、ブリューメル一八日直後、在来の国法に対して徹底的な不信を表明していることから、彼がこの憲法に対しても賛同できない立場にあつたのではなからうか。⑤。たんに、世襲王制の確立に対する不満だけといえようか。「チャルトリスキ派」が甘んずる必要があつた王国領勢力の優位に対する、地域主義的反撥を完全に無視していいものだろうか。同郷人であり、士官学校出身者で、チャルトリススキの信任もあつく、蜂起時代に彼の片

腕となつたニエムツェヴィチは、彼に反して、優勢な「愛国派」に属して活躍していた。イグナツィ・ポトツキと緊密な共同行動をとっていたジャコバン主義者コウオンタイは、蜂起時代に一大勢力となるワルシャワと王国領の市民階級に対して市民革命への道を準備しつつあつた。動揺する中、小シユラフタと農民勢力を基盤にした国王と領主層と、これらの革命的市民階級との階級的対立が先鋭化するきざしをもっていた^⑥。これは、必然的に、潜在的に温存されてきたリトアニアと王国領との利害の不一致に転化し、地域主義的対立を再燃させる可能性をはらんでいたといえよう。九二年春、『五月三日の憲法』に反対するタルゴヴィツァ連盟がウクライナで結成された。蜂起時代のコンシューニコにも対決をせまつたこの連盟は、かつてのチャルトリスキ家にかわつてロシアの支持をとりつけたポトツキ家と王国領の領主勢力の指導性が強い。ザクセン王朝時代の政体復帰をめざしたジェヴスキと、国王廃止とアメリカ型の連邦共和制の確立を期したシユェンスニイ・ポトツキが指導的役割を演じた。ジャコバン主義者コウオンタイをかかえ、再起をはかつた「共和派」のいま一方の一翼であつ

たとみなされないものか。^⑦ 社会改革をめざした王国領の議会勢力に対するよりも、基本的には、反チャルトリスキ勢力の結集体といえる。新憲法の進歩性に不満をいだいたロシアは、積極的に連盟に加担した。ロシア・「連盟派」連合軍を敵に、コシチューーシニコは、国王の甥ユゼフ・ポニャトフスキと善戦したが、国王が優勢な「連盟派」勢力に加担するにおよんで七月、彼は脱軍にふみきつた。^⑧

この際、「愛国派」主流のイグナツィ・ポトツキ、マワホフスキ、コウォンタイが亡命したのはザクセンのライプチヒで、「連盟派」の指導理念とは一脈通じる立場にあつた。「家族派」指導者のアダム・K・チャルトリスキは、ニエムツェヴィチ、ユゼフ・ポニャトフスキなどとともにウィーンに亡命した。^⑨ 第二次分割は、プロシヤによる再度の大ポーランド併合で王国領に打撃を与えたが、オーストリアが参加しなかつたので小ポーランド北部は確保された。広大なリトアニアとウクライナがロシアに併合されたことは、第一次分割後にウクライナから寸断されてワルシャワに勢力基盤を築きつつあつたポトツキ家に反し、国王を手放す形にもなつたチャルトリスキ家に大打撃を与えたとい

えよう。^⑩

ロシア軍に対して戦つた彼は、祖国防衛をはたしたにしても、「連盟派」を敵にまわした点で、彼は共和主義者でありえたであろうか。王権擁護のために戦つた彼は、「チャルトリスキ派」に近い主憲君主主義者であつたというべきであろう。この時期、ジロンド政府から光榮ある市民権を確得した彼は、名譽ある共和主義者になりえたが、連盟軍元帥シュチュエンズニイ・ポトツキを敵にまわしたかぎり、彼は共和主義者ではありえなかつたはずである。彼は、この元帥に宛てた九月六日付書簡で、複雑な心境で軍人として反ロシア的行動に参加した立場を説明し、いま一つの祖国に封くことを表明して深い理解を求める必要があつた。^⑪ 彼をこうした立場に追いやったものこそ克服されなかつた地域主義であろう。当時、家族^⑫やリトアニア領軍管区所屬のザレスキ宛^⑬だけではなく、接触を絶つことがなかつたアダム・K・チャルトリスキ夫人イザベラ^⑭やチャルトリスキ家から嫁いだコンスタンツィア・ザモイスカ宛^⑮に綴られた書簡が大きい比重を占めている。さらに、重要なことは、ワルシャワのチャルトリスキ邸に滞在し、最後

まで国家に忠節であった自分を証明する機会をもち、経済的援助も受け、ガリツィアのシュニアヴァのチャルトリスキ邸に立寄り、のちにロシア宮廷に入るアダム・J・チャルトリスキとも親交を交した。^⑥それでいながら、彼が選んだ亡命先は「愛国派」主流のがれたライプツヒであった。彼のこうした行動だけでも、彼等の間に摩滅の種子を播かなかつたであろうか。

これを、超党派の立場として、彼の主体的努力を積極的に評価すべきかも知れない。従来からの対立的な諸勢力と協調し、そこに足場を求めたからこそ、蜂起時代には国民的な最高指揮官になりえたともいえよう。しかしながら、いま一つの有力な勢力となりつつあった革命的な市民階級は、彼に全面的な同意を示しえたであろうか。実際上の蜂起指導勢力となるコウオンタイが重要な役割を演じていた「ライプツヒ亡命派」との共同歩調をとるにあたって、彼に多くの制約を与えたにちがいない。彼がルイ一六世処刑直前のパリにおもむき、ジロンド政府のルブラン外相と協議し、蜂起計画に対する支持と援助を要請する目的で提出した覚書は彼の個人名にすぎない。^⑦ルブランの失脚と援

助誓約の不成立、ロベスピエールの独裁権成立の過程でみられた暴徒的な蜂起市民の動向に対して嫌悪感をいだいた彼は、フランスに対する不信をつのらせ、イギリスにおもむく意志さえ示した。これは、コウオンタイから拒否され、イグナツィ・ポトツキとの協議後にライプツヒへもどつた。^⑧コウオンタイの立場からすれば、ロベスピエールと蜂起市民こそが待望されるべきフランス勢力であった。だからこそ、コシチューシュコはせいぜいはジロンド的立場から、それともラ・ファイエットと同等にみなされたし、分割三列強の立場に近いイギリスに期待をかけた彼は、敵対的行動者の烙印を押される可能性すらもあつた。これは両者間に生じた最初の大きな亀裂といえよう。イグナツィ・ポトツキは、それほどまできびしい批判的立場をとらなかつたとしても、コシチューシュコが潜在的にもつ、親イギリス的チャルトリスキ家の傾向を確認したにちがいない。これらの蜂起指導勢力の内部には、一方では階級的対立にまで発展しかねない意見の不一致と、他方では王国領とリトニア両地域主義に根ざした深刻な溝が横たわっていたとすべきであろう。

コウウンタイとコシチューシュー

蜂起時代、共和制王国領土はマゾフシェと小ポーランド北部の王国領と、リトアニア西部から構成されていた。ザクセン王朝時代にワルシャワを中心にして急速な発展を上げたマゾフシェの地位は、大ポーランドを背後にしていただけに、いずれも発展した後背地をもたなかった他の二地方に対して、指導性を相対的に増していた。このことは、ワルシャワがたとえ分割以前の複合民族的な連合国家に君臨できなかったにしても、より強力で密度の高い市民階級を基盤にした新しい国民国家の盟主になりうる可能性をもっていた。⁴⁹

大ポーランドとともに、強力な市民階級の抬頭をみていたマゾフシェには、隣接したプロシアからの圧迫もあって、対外的には革命フランスの動向に期待をかける風土があったといえよう。また、都市と中・小シユラフタ勢力に働きかけ、反王権の立場を明確にし、さらには反憲法勢力に化したタルゴヴィツァ連盟はもちろん、改革主義的憲法自体をも否定する革命的市民勢力さえ育てつつあった。その地位の確保からも、大ポーランドの解放と統合に最大の期待

がかけられたにちがいない。⁵⁰ これは、逆に、革命フランスが期待すべき地域でもあった。

ところが、ヤゲウォ王朝以来の伝統と、ともに農業的基盤が支配的であった小ポーランドとリトアニアは、それぞれが隣接していた前二者に対するものと比べ、相互の地域主義的反目も少ない関係にあったといえよう。ただ、小ポーランドの領主やシユラフタがオーストリアに、リトアニアのそれがロシアに対して接近ないしは反撥する形で、内部分裂の動きを強くもっていたといえる。市民階級を育てる点でマゾフシェに劣勢にたっていた小ポーランドでも、後発的ながら農民や中・小シユラフタが反封建的立場を志向したとすれば、有力な国内的支持をマゾフシェや大ポーランドの市民階級に見出したであろう。⁵¹ かつては小ポーランドに、そうして次第にマゾフシェとの依存を深めつつあった問題の、リトアニアは、強力な市民勢力を育成できにくい立場にあった。チャルトリスキ家のロシアとオーストリア接近、ラジヴィウ家のプロシア接近で内部分裂の度を深め、有力で指導的な国民主義の荷い手となるべき勢力にかけたリトアニアは、マゾフシェとは逆に、分割列強以外

の強力な対外的支持勢力をもつ条件にめぐまれていなかった。国内勢力としての基盤に痛手を受けた「シャルトリスキ派」が、再度ワルシャワに君臨できる地域的基盤は絶望的であったといえよう。^⑤

親フランスのザクセンにあったこの「亡命派」は、その意味で、フランスにあった有力なポーランド亡命勢力とともに、蜂起の中心となるマゾフシェと大・小ポーランド王国領が期待をかけた国外の指導的勢力であった。王国領の革命的市民と戦闘的農民に期待をかけ、フランス革命の精神に最も忠実なコウォンタイが蜂起指導部内で能動的な役割を演じ、比較的穩健なりトアニアを含めた全土の中・小シユラフタと、広範な農民の動向に期待をかけたコンチューシュコとは基本的に姿勢を異にしていた。^⑥蜂起の開始期でも極めて慎重で受動的に行動したコンチューシュコは、九三年九月にワルシャワからの蜂起を要請されてクラクフに状勢視察に出掛けたが、イタリアにおもむいてフィレンツェでニエムツェヴィチと協議する機会をもった。^⑦この両者の接触は、無条件に王国領の市民階級の側に立つ「ライプツヒヒ亡命派」を意識した彼が、自分の立場上の劣勢を

補なおうとしたものであったのではなからうか。同郷人のニエムツェヴィチとの連帯は、彼がりトアニアの蜂起と、それにもとづく行動上の指導性の確立を期待したこともよろう。さらには、シャルトリス家と内通ししやすい立場にあったニエムツェヴィツチを通じること、^⑧「シャルトリスキ派」との安全弁を確保し、ロシアの介入を阻止し、オーストリアの好意的中立を期待する企図があつたかも知れない。小ポーランドを蜂起の拠点にしようとした彼の計画は、もつとも彼にかなつたものであつたにちがいない。これは、コウォンタイとは立場を異にしたものであるとともに、勢力挽回を計る「シャルトリスキ派」に好機をつかませうる客観的条件すらもつものであつた。

遠く離れたローマでもワルシャワからの要請を受けた彼が、ようやく蜂起開始の決断に踏み切つたのは、九四年二月、ドレスデンにおいてであつた。^⑨彼の長期間の躊躇は、りトアニアの緩慢な蜂起の動向に反し、彼を局外者におきかねない、いづれも王国領を基盤とした圧倒的に優勢な蜂起勢力と、その対抗勢力自体にあつたのではなからうか。彼の名声を利用する諸勢力に対処するという消極的態度、

ないしは第三者的な冷静な打算すらもうかがえる。本格的な蜂起の火蓋は、こうして、マゾフシエのオストロウエンカで挙兵したマダリンスキ將軍によってきられた。クラクフに向けて進発したこの大ポーランド出身の將軍は、バル連盟参加者であり、コウォンタイに近い蜂起勢力の左派に属していた^②。彼の成功をみとどけつつ、コシチューシエはプラハ經由でクラクフに向い、マダリンスキ軍と合流することもなく、三月に国民防衛軍最高指揮官に就任する旨を宣言した^③。

共通の主要な敵対勢力をロシアやプロシア軍にしていたかぎり、コシチューシエと王国領の蜂起諸勢力との共同歩調はとれた。四月のワルシャワ蜂起は、コシチューシエの北上に呼応するかのようになり、革命的エネルギを燃え上らせた^④。しかし、彼の名であつただしく発布された布告や、五月七日に宣言された蜂起政府の臨時憲法ともいうべき『ポワニェツ布告』においても、コウォンタイの関与があつたはずであるが、彼の名のもとに、あくまでも農民解放と全共和国領土の巾広い諸階層に支持をよびかけ、革命的市民階級への期待は二次的な比重しかもっていない^⑤。具体

的行動においても、小ポーランド各地で転戦し、ラツワヅイツェでの勝利で国民的英雄の名声をかちとつたが、ワルシャワへは夏まで入る意志を示さなかつた。ワルシャワ蜂起の指導に没頭した「ポーランドのロベスピエール」コウォンタイと「オルレアン公」の別名を授つたイグナツィ・ポトツキが大歓迎でワルシャワ入りをした五月とは対照的である。蜂起が本格的段階に突入したこの時期、小ポーランドの農民軍を中核勢力にしたコシチューシエ軍は釘づけにされ、農民蜂起に活路を見出していった。それに反し、四月に成立していた「穩健派」の臨時代表委員会にかわり、蜂起政府の具体的な執行機関というべき国民最高評議會をワルシャワで組織し、イグナツィ・ポトツキとともにジャコバン勢力をも積極的な支持勢力として、強力に實際上の指導をすることになつたのはコウォンタイである^⑥。

市民階級と蜂起農民

コシチューシエの呼びかけや布告が広範な諸階層に期待をかけ、分割以前の国土を国民的基盤に意識したものであるが、九四年の蜂起がコシチューシエ蜂起と呼ばれても、国民ないしは民族蜂起と規定されにくい理由は、農民を

主力とした彼の最高指揮官の実体を示していよう。この時機を起点にして、生地をはじめリトアニアへの集中的で積極的な蜂起参加を広く呼びかけた彼の布告の数々は注目しに値する。これは、ロシア軍に対する戦略的な企図にもよろうが、リトアニア全土に対する関心の増大は、ますます彼に農民の基盤へ傾かせることになった。すでに四月、ワルシャワ出身のジャコバン主義者ヤシンスキ將軍によって蜂起をみていたリトアニアのヴィルノ市民になんらの積極的な呼びかけをしなかつた事実と対比されてよい。農民を国民軍の主体にして全国的蜂起を目的にしながらも、実質上は、一部の蜂起農民をロシア軍に対して投入したにすぎないといふべきであろう。このように、ワルシャワの蜂起市民にも距離をおいていた彼の行動は、国王と反蜂起勢力との直接的な敵対関係に介入する意志はなく、農民と中・小シユラフタを陣営につけ、これらの主要な対抗諸勢力の動向を決する中間勢力としての立場を印象づけているようにもとれる。これは、動向次第では革命的市民勢力を裏切り、国王と「連盟派」の立場にたちうる道にも通じていた。これは彼が意識しなかつたにしても、「チャルトリスキ派」からすれば、

起こりうるいずれの局面でも、コンチューシュコを通じて発言権を期待できたはずである。

国王と連盟指導者のロシアへの接近、一部領主層と富裕市民のプロシヤへの期待は、蜂起自体を先鋭化させ、コウオンタイに結集したワルシャワ市民階級とザヨンチュク、ヤシンスキ、マダリンスキ、ドンブロフスキ將軍たちの軍事的指導性を高めた。シユチェンスニイ・ポトツキとシユヴスキをのぞく主要な連盟指導者の死刑が執行された五月以降、国王の生命の危機がせまった六月にかけて、コンチューシュコは、はじめてワルシャワに接近を急いだ。④こうして七月、彼は国王とは社会秩序の回復を目的に協議し、⑤さらに、チャルトリスキ夫人に対しては、蜂起がフランス革命の立場をとらず、大議會時代の政体復帰がのぞましいことを表明している。⑥ジャコバン主義者ザヨンチュク將軍のもとにあった国民最高評議会の軍事法廷には、当時、国王の弟で大司教の地位にあったミハウ・ポニャトフスキはじめ、多くの反蜂起勢力が裁判にかけられ、テロルの恐怖がうずまいていた。ここで、彼は、ロシアとプロシヤ軍に対するワルシャワと国家防衛の立場から、国民最高評議會

の実際上の指導権をかなり握っていた革命的市民階級に背を向けるにいたった。八月以降、コシチューシニコによって設立された軍事法廷は、コウォンタイの名前にちなんで「フーゴニスト」と称されていたジャコバン主義者にもその手が及ぶことになった。^⑤

彼とともに転戦した小ポーランドの蜂起農民のように、全国的規模で農民は蜂起に立上ることがなかった。当時の農民がはたして市民革命への指導的勢力でありえたであろうか。たとえ外国軍隊の介入ですでに鎮圧されていたとしても、クラクフとヴィルノの市民蜂起はワルシャワ蜂起と呼応するものであったし、八月の大ポーランドの蜂起もまた、市民階級の指導性が大きい。蜂起の敗北は、ロシア軍によるコシチューシニコの軍事的敗北をみた一〇月以降、ようやく外国軍隊のワルシャワ占領によって一月に決した事実からも、市民階級がはたした役割は極めて大きい。蜂起の最終的段階でコシチューシニコとコウォンタイが、敵対関係にさえなりうる立場になったのも、当時のリトアニアを中心とした農民と王国領の市民階級がもっていた利害の不一致をこの両者が基盤にしていたせいといえよう。革

命フランスに期待をかけた王国領の広範な市民階級の解放に意を注がなかったコシチューシニコには、リトアニアの地域主義の傾向が、ここでも、認められないものか。「愛国派」のコウォンタイに対応する「チャルトリスキ派」の進歩主義的な一翼的な存在程度にみなされないのであるか。「ポーランド民主主義の父」と称されるコウォンタイと対比するならば、この時点の彼を民主主義者と評価づける立場は疑問視されていいのではなからうか。^⑥

アメリカ革命で獲得した国民的英雄の荣誉は、「全般的動向における行動の統一」を念願した彼の主体的努力で、蜂起時代でも傷つけるものではなかった。数多くのエピソードを生んだ戦場での輝かしい活躍と悲劇的敗北は、むしろ、国民的英雄の輝かしい英雄でありえた。^⑦しかし、当時の状況では、はたしていかなる勢力がワルシャワ公国を経て今日につながるポーランド国民主義の推進力となりえたであろう。ツァールや国王の慈悲にさえすがり、領主勢力からの解放を当面の課題にしつつも、抬頭する市民階級とは利害の不一致を多くもったリトアニアや全土の農民は、革命勢力としては未成熟であったといえる。蜂起敗北の過程で

も急速に分解をとげた彼らが、はたして強力で指導的な国民主義の荷い手となりえたであろうか。当時の状況に即するかぎり、社会革命をめざして分割列強軍と最後まで戦い、王権と「連盟派」を敵にまわし、コンチエーシュコからやえも孤立化させられて窮地に追い込まれた市民階級勢力にこそ、指導的な国民主義を確立させうるエネルギーが燃えだぎっていたといえないものだろうか。④⑤それがたとえ結果的には裏切られることになるとしても、革命フランスに期待をかけ、さらにワルシャワ公国時代にはナポレオンとをえ結びつくことになる王国領の市民階級からすれば、蜂起時代のコンチエーシュコに対して国民主義者の資格を賦与できたであろうか。

九五年の第三次分割は、国家の滅亡と彼の前半生の暮を閉じさせた。彼の後半生を取巻くことになる激動のナポレオン時代に展開した国際関係を重視しない限り、彼の国民的英雄という権威すらが充分に定着しえない背景を、この蜂起時代は彼に背おわせたといえよう。

④ W. Bartel, *Ustrój władz cywilnych powstania Kościuszkowskiego*, Wrocław, 1956; A. Zahorski, *Warszawa w powstaniu*

Kościuszkowskim, Warszawa, 1967; E. Moritz, *Preussen und der Kościuszkow-Aufstand 1794*, Berlin, 1968 などから、この蜂起時代のコンチエーシュコから引用されている。

② Historia Polski, II, I, ss. 233 ff. の憲法の國際的意義について H. B. Hill, "The Constitutions of Continental Europe: 1789-1813", *Journal of Modern History*, vol. VIII, 1936, p. 82, p. 90.

③ Historia Polski, II, I, ss. 236-249.

④ 蜂起の動向を知りたければ、Pisma, nr 15.

⑤ Czy Polacy, s. 75.

⑥ Historia Polski, II, I, ss. 269-286; *History of Poland*, pp. 380-383; W. Tokarz, *Rozprawy i szkice*, Warszawa, 1959, I, ss. 342-357.

⑦ Historia Polski, II, I, ss. 296-298, 307-308; *History of Poland*, p. 370.

⑧ 國王冠に彼は脱軍帽を直接授けられた。Pisma, nr 16.

⑨ Historia Polski, II, I, ss. 313-315; J. U. Niemcewicz, *Pamiętniki czasów moich*, Warszawa, 1957, I, ss. 160-170; S. Askenazy, *Książę Józef Poniatowski 1763-1813*, Warszawa, 1910, s. 41.

⑩ Historia Polski II, I, ss. 308-311; J. Jedlicki, *Klejnoci i partery społeczne*, Warszawa, 1968, ss. 183ff.

⑪ 立憲議会は「マシントマン、メルマン、ヤンサム、ヤン、シマール、ジョー」の名譽ある市民権を贈った。G. Rudé, *Revolutionary Europe 1783-1815*, New York, 1964, p. 208 を参照。また「蜂起区」を Pisma, nr 18.

⑫ ibid., nr 21.

⑬ ibid., nr 22.

- ① *ibid.*, nr 19, 20, 23.
- ② *ibid.*, nr 24.
- ③ M. M. Gardner, op. cit., p. 55; K. Kozłowski, op. cit., ss. 116-120.
- ④ Pisma, nr 27.
- ⑤ K. Kozłowski, op. cit., ss. 125-126.
- ⑥ I. Gieysztorowa i inne, op. cit., cz. 2.
- ⑦ F. Skarbeck, Dzieje Księstwa Warszawskiego, 1897, I, ss. 45-75; W. Tokarz, op. cit., I, ss. 168-190; A. Zahorski, op. cit., ss. 55-57.
- ⑧ ニエトニトニ関シテ、J. Ochmański, op. cit., ss. 133-141. 小ポーランドに關シテ、J. Rutkowski, Historia gospodarstwa Pol-
ski, Warszawa, 1953, ss. 284-288. 又、拙稿「ガリチヤ問題とポー
ランド」(『西洋研究』七四号、一九六七)二五—二六頁に參照。
⑨ 階級分化の進展過程については、M. Francić, Ludzie iżni w
osiennatowicznym Krakowie, Wrocław, 1967 が極めて詳し。
また、小ポーランドの動向は、ロウレンスに基いて具体的に理解
せざるべし。參照せよ。W. Tokarz, op. cit., I
ss. 27 ff.
- ⑩ B. Zientara i inne, op. cit.; N. Gąsiorowska, Górnictwo i hu-
tnictwo w Polsce, Warszawa, 1949; J. Wyrozumski, Państwowa
gospodarka solna w polsce do schyłku XIV w., Kraków, 1968;
V. Hehn, Das Salz, Berlin, 1873; Napy, I, nr 6, II, nr 1, His-
toria Polski, などを綜合して考察する。又、農耕、牧畜社会を基盤とし
た内陸的リャブニフなトランプも不可欠な岩塩産出地が皆無に近くな
が判明する。國王財産とされてきた岩塩鉱山は、小ポーランドのト

- エリチカやウイヌワ河流域の大ポーランドという王國領には広く分布
する。チャルトリニキ家の王權獲得の原動力の一つには、相対的に供給不
足にさせた王國領の岩塩採掘權と流通機構の確保と集中、第一次分割
後にオーストリアの分割下におかれたガリチヤとロシアからの供給
を有利に実現する必要があったといえないものか。逆に、チャルトリ
ニキ家の没落は、大・小両ポーランドの岩塩産出地の確保と、その供
給源となれなかったことも、大きく作用していると考へた。
- ⑪ 本章註の引用の「覚書」からも具体的に理解できる。
- ⑫ J. U. Niemcewicz, op. cit., II, s. 65.
- ⑬ Pisma, nr 28, 29; K. Kozłowski, op. cit., ss. 129-130.
- ⑭ W. Tokarz, op. cit., II, ss. 58 ff.
- ⑮ Pisma, nr 30.
- ⑯ A. Zahorski, op. cit., ss. 76-81.
- ⑰ Pisma, nr 30-73 は蜂起時代に該當する。書面も含まれるが、実に
広範な地域と階級への布告にみちみちている。『ポロニヤ報告』の
全文は Pisma, nr 46.
- ⑱ A. Zahorski, op. cit., ss. 126-127.
- ⑲ Pisma, nr 50, 51, 53, 55 などがこれらにわたる内容である。
- ⑳ B. Limanowski, Historia demokracji polskiej w epoce
porozbitowej, Zurich, 1901, ss. 30-41.
- ㉑ A. Zahorski, op. cit., ss. 130-144.
- ㉒ Pisma, nr 63.
- ㉓ *ibid.*, nr 64.
- ㉔ A. Zahorski, op. cit., s. 298; History of Poland, p. 388.
- ㉕ A. Ostrowski, Hugo Kofffataj: Ojciec demokracji polskiej,
Warszawa, 1946; J. Jedlicki, op. cit., ss. 183 ff.

⑧ History of Poland, pp. 383-390; J. St. Kopcewski, op. cit., ss. 211 ff.

⑨ A. Świętochowski, Historia chłopów polskich, Warszawa, 1949, I, ss. 420 ff.; T. Lepkowski, Polska-narodziny nowoczesnego narodu 1764-1870, Warszawa, 1967, ss. 15 ff.; J. Ochmański, op. cit., ss. 151-155 などが参照されてゐる。

⑩ この蜂起を、市民階級の立場から、積極的にヨーロッパ近代史上の市民革命として把握しようとする動向は、E. Leśnodorski, Les jacobins polonais et leurs confrères en Europe, Wrocław, 1964 への理解を助ける。

四 ブリュメール一八日前後とツァールへの姿勢

——民族解放思想の底流——

プロシア支配下の大ポーランドにおけるドンブロフスキの活躍は、強力な蜂起に支えられてめざましいものがあつた。⑪それに反し、スヴォーロフとヘルセン指揮下のロシア軍に対し、ニームツェヴィツキを従えて対峙したコシチューシーシュコは、ポニンスキ將軍の急援を待たずに負傷し、ロシア軍の捕虜となつた。マチェヨヴィツェでの悲劇的な軍事の敗北は、戦鬪力の欠けた農民軍以外に有力な蜂起勢力をもたなかつた小ポーランドの状況によるだけではなしに、蜂起指導勢力の深刻な分裂がもたらした彼の孤立した政治

的立場にももたらさう。⑫

コウォンタイはオーストリア側に逮捕され、フランツ二世によつて一八〇二年に釈放されるまで、前後八年にわたる監禁生活を送ることになるが、ワルシャワ公国時代においてもナポレオン体制のもとで進歩思想を代表した。⑬ドンブロフスキとザヨンチュクなどはナポレオン陣営に参加し、ポーランド軍団を編成してイタリア各地を転戦し、ワルシャワ公国建国の主體的勢力となる道を選んだ。マワホフスキとイグナツィ・ポトツキという「愛國派」主流も、スタニスワフ・K・ポトツキを加えて、ワルシャワ公国で指導的役割を演じることになる。⑭以上のような王国領諸勢力がナポレオンに加担する姿勢を示すことになるが、蜂起後のチャルトリスキ父子は、ともにロシア宮廷に入った。アレクサンドル一世の思想に影響を与えたアダム・J・チャルトリスキは、この自由主義的ツァールの側近として、一八〇二年には外務大臣の要職につき、のちにも反ナポレオンの立場を通じて、親ロシア政策を展開したことを指摘しておきたい。⑮

比較的短期間の監禁生活後、ニームツェヴツチとともに

アメリカに向けてペテルスブルクを出発できた彼は、チャルトリスキ家から多くの配慮を受ける立場であったと想像できる。この際、彼はツァール夫妻から年金として一万八〇〇〇ルーブルを受取るようになった^⑥。これは、フランス革命の波及で打撃を受けた蜂起時代のチャルトリスキ家が、抬頭するナポレオンとともに行動する可能性をもつ王国領諸勢力に、すくなくともコンチューシュコが加担しないこと、さらに、決定的段階で反ロシア^⑦「チャルトリスキ派」の陣営にたたないようにはかった先制的な策動であったかも知れない。この年金を最終的にはツァールに返納する意志をもっていたコンチューシュコは、一八一〇年の彼の遺言状からうかがうかぎり、ロンドンの一銀行に預金していた事実がある。しかし、彼の影響力を認めたバヴェル一世もまた、誠実な騎士道精神をみこんで、彼が帰国しないこと、再びポーランド問題に介入しないこと、ナポレオンとその同調者とともにロシアに対して武器をとらないことなどを誓約させる企図をもっていたのではなからうか。会谈内容には明記されていないが、彼がこうした要請に応じたことさえ想像できないこともない。

こうした背景をよりどころに、彼がナポレオンに加担しなかつた理由と動機を考察することは、本論の課題に対して一つの有力な手がかりを提供してくれないものだろうか。それは、ナポレオンに対するコンチューシュコの動向が、ナポレオン時代に無視できない役割を演じたという想定を裏付ける論拠にもなろう。いずれにしても、彼とともに釈放されて王国領に帰国したイグナツィ・ポトツキと別れたコンチューシュコは、ジェファーンソンの待つアメリカに渡った。その彼が、九八年にフランスへ渡ってナポレオンと会見するにいたった時点から、問題の核心に取組む必要があろう。

まず、ロシア側の立場からナポレオンに接近し、彼の動向を的確にとらえ、彼との接触を通じてドンブロフスキやヴィビツキに結集した王国領の親ナポレオン勢力に対する影響力と発言権を確保しようとした立場が推察できる。八月にフランスの軍事大臣シェーレルと接触をもち、提出先は不明であるが九九年一月に『ロシアについての覚書^⑧』を書き上げたと推定される彼は、総裁政府とはもちろん、タレランとも緊密な関係を結び、ポーランド軍団にも理解を示

している^⑨。ワルシャワ市民の立場で蜂起に参加したバルスがヴィビツキとともに組織していた結社「アゲンツィア」や、ジャコバン主義者のドモフスキ、デムボフスキ、パヴリコフスキなどの「ポーランド代表団」、さらには、「ポーランド共和主義者協会」にさえ彼が接近をはかったのも、彼が置かれていた親ロシア的立場による影響力の行使として追求できないこともない^⑩。ブリュメール一八日以降、ナポレオンに対抗するかに自由主義的ツァール、アレクサンドル一世の登場をみるが、この時期から彼の沈黙が開始されたのは、亡命ポーランド人に多大の影響を与えたにちがいない。

すでに第一章で触れた『ポーランド人は独立のために戦うことができるか』の構想も、一面では、ロシアの自由主義的改革に大きな発言権をもっていたアダム・J・チャルトリスキが○三年に練ったポーランド再建計画とは基本的に一致しているといえよう。両者には農奴解放と連邦主義的政体の確立、分割前の領土回復についての共通の姿勢さえがうかがえる^⑪。当時、○三年にはポーランド軍団がフランス領サン・ドミンゴ島の原住民弾圧に投入されていた。

軍団指導者は、この犠牲を王国領を優先にしたポーランド解放に有利な取引材料として、現実主義的な立場から利用する立場でナポレオンと対処したにしても、これに対する「チャルトリスキ派」とコシチューシュコの批判的な態度は、亡命ポーランド社会にも大きな動揺を与えたことは確かである。ブリュメール一八日以降、亡命ポーランド人社会から逃避するように、反ナポレオンのなスイス人ツェルトネル家に滞在することになった彼の許には、国内から「チャルトリスキ派」の有力者が相次いで訪問したし、パリにあったイギリスのフォックスも彼と積極的に接触をはかった^⑫。ナポレオンと軍団勢力に先行してアダム・J・チャルトリスキが『ロシア抹殺計画』を○五年に発表した当時、コシチューシュコは「未来における同盟の旗の下に、ポーランドの先頭に立ってナポレオン個人に対して戦う」者として「チャルトリスキ派」に反映していたとさえ考えられる。「チャルトリスキ派」が彼を秘密裡にパリから引抜こうと策動しても思儀ではなかった^⑬。

○六年の決定的段階に彼がフーシェに提出した三条件も、伝統的なアダム・J・チャルトリスキの立場と合致した内

容をもっている。こうした具体的な態度から、「チャルトリスキ派」の一翼的存在としてのコシチューシニコの一貫した立場が充分に理解でき、ナポレオンに加担することなく、ロシアに対して武器をとらずにツァールに対して忠誠を守ったと解釈することも可能であるし、充分に説得力のある説明ともなりうる。これは、その後もフランスにあった彼がウィーン会議時代にアレクサンドルとパリで会見する機会をもち、さらにはアダム・J・チャルトリスキとともにウィーン会議で彼が国家再建に政治生命をかけることができた前提条件としても重要な意味をもつ。このような経過をたどりながらも結果的には、すでに分解過程にあったリトアニアを永久にツァールの帝冠に捧げ、王国領をロシアの従属に供した一人がコシチューシニコであったという立場にさえもたつことができよう。彼の後半生を評価するにあたって、彼がとらざるをえなかった他律的なツァールへの姿勢は、以上のように、無視できない重要な意味をもったとすべきであろう。ナポレオンに加担しなかった彼は、自由・共和主義や国民主義的立場によるものであったと楽観的にはいえない。基本的には、「チャルトリスキ

派」を通じたリトアニア的地域主義的基盤が強い影響力をもったのではなからうか。

ここで、のこされた課題として、彼の民族解放思想をどのように対ナポレオン行動と結びつけるべきであろうか。彼がティルジット条約後に完全な沈黙を守った事實は、なおもツァールへの忠誠とチャルトリスキ派との同一歩調を示すものであったにしても、ブリュメール一八日前後から積極的に彼がこうした行動のみでのぞみ続けたという確証もなりたちにくい。まして、「チャルトリスキ派」の行動にそうべくパリを離れもしなかった。そのような意味で、設定された以上のような諸条件と検閲制度が支配したブリュメール一八日後のフランスの状況下、匿名で書かれた彼の愛国・民族主義的著作で表明された彼の思想の中にこそ、反ナポレオンの行動に彼をかりたてたすべての問題を解く鍵が見えるのではないだろうか。

これは、ナポレオンとも根本的に対立するジャコバン主義者パブリコフスキと執筆されただけではなしに、ツァールや「チャルトリスキ派」の期待にも反するものであった。匿名をかりながらも、ポーランド問題の積極的介入を示し

たことは、想像できるツールに対する宣誓にさえもさからったせい一杯の行動であつたといえよう。

この国家再建論の内容は、「自分自身の努力による独立」を基調にし、ロシアの支持を求めた「家族派」はもちろん、ナポレオンを盟主にした軍団勢力に対しても、まず、直接ないしは間接的に、痛烈な批判をあげさせている。^⑭ ついで、分割に寄与した国王、領主、シュラフタの非愛国主義的行動と機会主義が徹底的に非難され、人権思想に根ざした市民と農民の解放が唱導され、国土に即応した戦略論が展開されている。^⑮ 農民の革命意識の高揚が一方強調されながらも、他方で革命や蜂起時代にみられた市民の暴徒的な無秩序に反省が加えられていることは、彼の蜂起時代の経験からも当然であろう。^⑯ 分割以前の領土を念頭に、諸地域と諸階層の代表による連邦主義的な合議制を基礎にした全国民による民主主義的共和国の建設が主張される。^⑰ 広大な領土的基盤にたった広範な民族統一と分割列強に対決をせまる民族的美徳の高揚が唱導され、当時であつては幻影にすぎなかつた祖国に対する熱烈な愛国主義と結びついた民族主義の高揚が基調となつている。これは、「スラブ愛」を基調にし

たポーランドのイニシャチヴによるパン・スラブ主義思想を東欧・ロシア史上にはじめて提起したものと考へたい。^⑱ 彼なりの国富論で民族独立と解放への道標も示されるこの教義問答的著作にこそ、彼が主体的行動をとることができなかった状況下に、ポーランドに期待をかけた民族解放思想が結実することになつたといえよう。^⑲ こうした彼の思想が、パン・スラブ主義の唱導者として、ロシアを含めた分割列強のみではなく、ナポレオンにも強力な抵抗を後半生において示す結果になつたといえないものだろうか。分割不承認を宣告している彼は、没落するリトアニアを背景にした理想主義的な分割前の国家再建論者として、現実主義的なワルシャワ公国の指導勢力との共同行動はこの時点でもてなかつた。しかし、時代の潮流を鋭く洞察した彼の著作が、一九世紀を通じて今日のポーランド国民国家の形成を有利に導く民族独立運動の重要な指針とされたことは彼の民族解放思想が今日まで生命力をもちえた何よりの証拠であろう。

むすび

最後にのぞんで、彼の年令や健康状態も彼がナポレオンに加担しなかつた理由として考慮すべきであろう。それ相

応の歴史的背景から、主体性の稀薄なリトアニア人特有の性格からする日和我主義的打算も無視したくはない。ナポレオンは、ドンブロフスキは大ポーランドでは知名度が高いが、コンチューシユコが故国に残した広範で絶大な権威に比べものにならないことを、いわゆる「一八〇七年戦役」の緒戦で痛感し、彼に期待をかけた。他方、ツァールと「チャルトリスキ派」は、彼の沈黙を最大限に利用し、ポーランドにおける親ロシア的傾向を助長した。ザクセン王朝を迎えたワルシャワ公国は、王国領を基盤にして共和制王国の伝統を回復し、農奴解放と市民的自由を東欧の一角にはじめて確立できる憲法をもった。戦時中という状況で憲法の理念が十分に達成されなかったが、分割列強下にあったポーランドや東欧で、これ以外にどんな国民的自由を獲得する道があっただろう。コンチューシユコがたとえこうした現実に対して好意的な観察者であったにしても、彼の不参加は王国領を中心とした敵密な意味でのポーランド国民史上では汚点を残したといわれてもいたしかたない^②。

彼がナポレオンに加担していたとすれば、検討を加えてきた前半生における彼の積極的な諸側面は地に陥ちたであ

ろう。一〇年近いナポレオン時代の沈黙は、彼の名声を保全しただけではなしに、ナポレオンの敗北こそが、むしろ不確定な要素を多くもっていた前半生の輝かしい諸側面のみを止揚させたはずである。彼の生涯の最終的段階が、ナポレオンに対比できる彼の自由・共和主義、国民主義、民族解放思想が国民的英雄としての権威を定着させたといふべきであろう。ツァールも、こうしたコンチューシユコ像の形成に働らきかけ、「チャルトリスキ派」を通じてポーランド社会に根をおろさせることができたといえよう。さらに重要なのは、ウィーン会議後、彼がアレクサンドル一世にも加担せずに孤高の余生を送ったことも、彼の国民的権威をたかめたであろう。また、ウィーン体制と長期の分割下のポーランド社会にも、積極的に彼の全体像を美化し、権威づけ、時には利用する国民的心情も働いたはずである。こうして、実質以上に輝かしい前半生の讚美を生み、ワルシャワ公国成立期の反ナポレオンの行動の基礎にさえもこれらが無条件に適用されたといふべきであろう。そのようなわけで、彼の後半生と、没後に形成された全体像でティルジット条約直前にいたる彼の行動原理を論究した研究動

向が、ワルシャワ公国成立期の彼の行動を理解する上で、多くの曲解を生ませることになったといえる。

ナポレオンから決断を迫られた彼もまた、複雑な内外状況に対処する必要があった一人の政治的人間にすぎなかった。その彼を論究した諸見解も、政治的立場や状況に左右されることが、あまりにも大きかったといえよう。しかしながら、フランス革命とナポレオン時代に彼が演じた歴史的作用は、次元をかえて、その実際の活動と行動半経の大きさから、それなりに高く評価されるべきであろう。未紹介に近いコシチュエシコの個人研究に一つの視角を与えるはずの本論は、以上のように、彼の全体像の評価をめぐって地域主義の基盤を設定し、ロシア側の他律的な働きかけと、彼の主体的な民族解放思想を反ナポレオンの行動の基礎に据える程度にとどまった。しかしながら、具体的に検討を迫る必要があるワルシャワ公国の位置づけを、従来のようにフランスのみではなく、ロシアとの関連から考察し、ナポレオン時代の東欧史研究の一課題にさざやかな糸口がみい出せたとすれば幸いである。

① G. Zych, Jan Henryk Dąbrowski 1755-1818, Warszawa, 1964,

ss. 101-135 が、特に詳しい。

② F. Koneczny, op. cit., ss. 339-354; F. Paszkowski, op. cit., ss. 165-176.

③ A. Ostrowski, op. cit., ss. 40-43.

④ B. Grochulska, *Księstwo Warszawskie*, Warszawa, 1966, ss. 92-98.

⑤ 最近のすぐれた研究には、J. Skowronek, *Antynapoleońskie koncepcje Czartoryskiego*, Warszawa, 1969; P. K. Grimsted, *The Foreign Ministers of Alexander I*, Berkeley and Los Angeles, 1969, chap. 4 などがある。参考は別項を参照。

⑥ 全訳内容は *Pisma*, nr 74 に収録されている。また、年金日記についても詳しく研究が、F. Paszkowski, op. cit., ss. 283-284.

⑦ *ibid.*, s. 283.

⑧ A. M. Skalkowski, op. cit., ss. 164-169 に、書簡一通と覚書全文がある。

⑨ 第一章註⑤参照。いすれよりで書かれたタレン宛の書簡二通、一九九年三月二十五日と四月二日のものも、*ibid.*, ss. 171-172 を参照。W.-M. Kozłowski, *Kościuszko et les légions polonaises en France*, *Revue Historique*, 119-120, Paris, 1915 年刊。拙著の⑥ 関係資料が豊富に紹介されている。

⑩ *Historia Polski*, II, I, ss. 74-76; E. Halicz, op. cit., s. 32.

⑪ M. Kuliel, op. cit., chap. IV; J. Skowronek, op. cit., ss. 65 ff.

⑫ E. Halicz, op. cit., ss. 133-134.

⑬ J. Skowronek, *Le programme européen du Prince Adam Jerzy Czartoryski en 1803-1805*, *Acta Poloniae Historica*, XVII, 1968, pp. 137-159; E. Halicz, op. cit., 134. 以下、この註文を参照。

については、前掲『西洋史学』七四号所載拙稿三〇ページと三七ページ註③参照。

① Pisma, nr 92, 93, 94, 95, 96, 97, 98, 99, 100 のいずれも、アントン サンドル一世とアドム・J・チャルトリスキ宛書簡である。ツマールとの金見出しは、M. M. Gardner op. cit., p. 134 株た、E. Kipa, Studia i szkice historyczne, Wrocław, 1959, ss. 78-84 の間の事情を述べている。

② Czy Polacy, ss. 15-23.

③ Ibid., ss. 69 頁、特注 ss. 102-103.

④ Ibid., ss. 81 頁

⑤ Ibid., s. 122.

⑥ Ibid., ss. 120-128.

⑦ 分裂の悲哀を味わったリトアニアは、他方で輝かしい「スラヴ愛」ないしは「スラヴびいき」の唱導者を生む重要な役割を演じた。リト

アニア出身のミッキェヴィチがその代表とされるが、一九世紀に発展するメン・スラヴ主義を理解する上でコンチエーシュコも重要といえよう。H. Kohn, op. cit., pp. 43-44 を参照。

⑧ Czy Polacy, ss. 128-132 は「ポーランドの富について」と題された章である。

⑨ Ibid., ss. 66-67.

⑩ E. Haliçz, op. cit., ss. 159-160. なお Archiwum Wypickiego, nr 145 株、一七九七年七月の『イタリヤにおけるポーランド軍団の歌』の題名で、『ドンブロンスキ將軍のマスルカ』のためにヴィビッキが作詩したオリジナル・テキストであり、「神はコンチエーシュコを許したまおう」の歌詞で結ばれていたことの意味は大きい。

(本論文の概要は昭和四三年七月の京都大学西洋史読書会で発表した。また、昭和四三年度文部省科学研究費各個研究の一部をなすものである。)

(京都産業大学助教授)

On the Causes of the Anti-Napoleonic Behavior of Kościuszko

by

Akiyoshi Nakayama

On the eve of the Treaty of Tilsit, Tadeusz Kościuszko (1746-1817), the Polish national hero, who was emigrated to France, played an increasingly important role in the formation of the Duchy of Warsaw. It is very interesting why he decided against Napoleon's proposal, while the leaders of Polish Legions, inclusively nearly every Pole in and out of the country, and even the leaders of the partitioning Powers expected him to agree with Napoleon, but, he kept silent until the Congress of Vienna.

Leading opinion on this problem explains it as his liberal republicanism and patriotic nationalism against Bonaparte, shown already in the time of the American Revolution and in the Rising of 1794, that is, during the first half of his lifetime. But, his intimate relations with the pro-Russian Czartoryskis during his life, and his favorable view of Czar Paul I and Alexander I in the second half of his lifetime, especially after liberation from Petersburg in 1796, brings forth questions against the above-mentioned opinion.

This article examines at first, his background of liberal republicanism and patriotic nationalism in connection with his Lithuanian background, in the context of political and social life in his time, and shows that his high position in the first half of his life became established after his long silence and a period of co-operation with A. J. Czartoryski at the time of the Congress of Vienna. Eliminating difficulties in the application of his beliefs and behavior up to the Defeat of Maciejowice in 1794 as the cause of his anti-Napoleonic behavior in 1806-1807, we see his dependence upon the Czartoryski's anti-Napoleonic policy with Czar Alexander I.

From such viewpoints we see that his autonomous efforts under the hard and complicated situations occurring after the coup d'état of Brumaire, led to his anonymous catechetical booklet "Czy Polacy wybrać się mogą na niepodległość" (May Poles Fight Their Way to Independence?), published in Paris in 1800, and a well-known letter to Fouché, in the beginning of 1807. From this, we come to realize that the very problem

is his deep preoccupation of liberation of the many Slavonic peoples under the former United Polish-Lithuanian Commonwealth against any partitioning Powers, determined his anti-Napoleonic behavior ; and so he was a leading pioneer in the process toward crystallization of Pan-Slavism, and a great Slavophile.

“Twelve Patterns” on Chinese Emperor’s Garments

by

Minao Hayashi

“Twelve patterns” of the Chinese emperor’s garments are enumerated in the chapter of I-chi in *Shang-shu*. This article tried to find out each of the “twelve patterns” among the archaeological finds contemporary with the formation of the chapter of I-chi 益稷篇 of *Shang-shu* and its notes. Owing to the recent development of chinese archaeology, we succeeded in identifying the “Twelve Patterns” which knowledge obliterated early in Han period. By this new identification, we were also able to explain the origin of the legend that these patterns decorated the emperor’s garments.

A Note on the Historical Materials of Khitay-name by Ali Ekber

by

Juten Oda

This (Khitay-name) is, not a travel-book, but a systematic description of China in Persian which was finished at Constantinople in A. D. 1516. But certainly the author, Ali Ekber, stayed in Peking. The present writer tries to confirm a few features of his travel according to the main accounts in twenty chapters of this book : for instance he went to Peking by way of the tribute route from Turkestan. This route is offered under the names of several cities written in the first part of the 9th chapter. In the 2nd chapter there is a description of the Imperial